



ともに

県立友部特別支援学校
支援だより 第2号
令和3年1月18日 発行

友五郎塾 オンライン講演会 報告

講演会「発達障害の僕から 母親から」
～不登校・ひきこもり・いじめ・発達障害の四冠王！～
今だから言えること



友部特別支援学校主催、水戸西ロータリークラブ協賛の「友五郎塾」オンライン講演会が行われました。

<第1部 講師：冠地 情 氏>

コミュニケーションの難しさは人間関係の生き辛さに重なっており、いろいろな所に悪循環をもたらしている。原因はコミュニケーションの経験不足にある。経験不足を知識やスキルで埋めることは困難であり、経験を積むことが大前提。これにより自分で自己肯定感を得るための基礎土台が創られる。思春期のうちにいろいろな人と関わって自分と違う価値観と、もやもやする経験がコミュニケーションを支えてくれる。学校、家庭、職場など人間関係のしがらみのない場所（サードプレイス）で、自分の好きな話をたくさんして、否定されない、大人がフォローしてくれる場があるとよい。

ひきこもりになると考え方や人間関係が退化して言葉が出にくくなる、人の感情に過敏になる、人のいる場にいるだけで辛くなるなどいろいろな症状が出て回復には倍の時間がかかる。いじめや不登校、ひきこもりが始まってから慌てて子どもと話をしようとしても難しく、いろいろな話題が循環する家庭や社会になってほしい。

「イトコサガシ」のワークショップでは「試した時点で大成功、大成長」をキーワードにしているが、いろいろな価値観に触れ、コミュニケーションを楽しく試す。そしてみんなでコミュニケーションを建設的に創り上げる場を増やせるとよい。

<第2部 講師：冠地俊子 氏>

テーマは「社会の側に立つのではなく、個の立場に立って発達障害を視る」

私の中には3つの視点（親としての視点、自分が子どもであった時の視点、自由な個としての視点）があり、自分がどの立場にいるかということ意識していると、相手を理解できるチャンスになる。コミュニケーションの方法としては、息子から「話をする時には前置きをしてほしい。」と言われた。「否定するつもりはないんだけど・・・」など、前置きをすることで話の行き違いを避け、自分をコントロールすることができるようになった。

「息子さんが発達障害だと知ったとき、親として自分の中の葛藤をどうやって乗り越えたのか」と母親からよく聞かれるが、乗り越えるのではなく、葛藤の本質に迫るという考え方を。例えばフラッシュバックを防ぐのではなく、フラッシュバックがなぜ起こるか知るとのこと。

今の社会のルールにあてはめて発達障害を理解することには無理があり、発達障害者には一人の人間として対することが大切である。

<第3部 質疑応答>

質問：不登校・ひきこもりになった時の気持ちや状況を振り返るとどう感じ、どう思いますか？そこから今の自分に至るまでの心の変化はどうだったのでしょうか？



回答：いじめや学力不振、部活がなくなったことで「燃え尽き症候群」になり、不登校・ひきこもりになったのではないかと感じました。はじめは被害者意識が強く、大人・学校・親のせいだと怒りがあつた。いろいろな人から話を聞くと、多面的な状況が見えてくるようになり、僕の心も変化し環境を変えるために自分にできることは何だろうと考えるようになった。

質問：不登校やひきこもりになったとき、母親としての子どもへの接し方・見守り方はどのようにされていたのでしょうか？



回答：親が自立をしていることが大事で、自立していない親だと見本がないので子どもは自立できない。具体的には子どもの好きな物を一緒にやり、その場を作ることが大切である。そうすることで自分との違いや相手のことが分かり、コミュニケーションになる。

冠地 情氏 著書
講談社より好評発売中！



あとがき

12年目を迎えた特別支援教育研修会「友五郎塾」。コロナ禍の中、オンライン研修会となりました。ご視聴くださった皆様から「毎年楽しみにしています。」「アーカイブ配信は時間と場所を選ばないので嬉しい。」などのお声をいただきましたことは、開催にあたって本当に励みになりました。来年度も社会情勢を鑑み、会場開催、オンライン開催のメリットデメリットを慎重に検討しつつ、開催につなげていく所存です。ご視聴くださった皆様に心より感謝申し上げます。



県立友部特別支援学校 支援部